

明日香風

久恒啓子歌集

短歌研究社

明日香風

久恒啓子歌集

短歌研究社

目次

明日香風

つらつら椿

檣あふちの花

約束

蘇州の空

春一番

志賀島

みちのくの宿

碓氷峠うすひ

風鈴

32 30 27 22 20 17 15 12

肖像画

水晶体

岡城址

さいはての三井楽みみらく

ロボット

手を振って

明日香風

いぶかしむ

つらつら椿

消えゆく霧

有野正博先生

雲の帽子

ミステリーめく

64 61 58 56 54 52 50 48 45 43 40 37 34

バンザイ崖^{クリフ}

66

霽れしかと

古きアルバム

70

指呼しつっ

72

長春の風

75

飄飄と^{へうへう}

80

色に重さが

83

鋼のごとく^{はがね}

85

霽れしかと^は

87

阿武隈川

91

由布岳

93

遠朝廷^{とほのみかど}

96

不揃ひの屋根

99

心地よき孤独

101

オリーブの実

104

十日月

106

雨のカレル橋

109

舞舞螺^{まゆまゆつがひ}

114

デニムの帽子

119

カタルパの花

123

多摩川

125

不等辺三角形

128

白き蝶

131

着ぶくれて

135

春の望月

137

海峡

旋律暗き

言葉の森

風の幅ほど

七曲り道

読みさしの本

巾着田
きんちやくだ

ほととぎす

どうぞお先に

灯火色
ともしびいろ

朴の木

万葉講座

145 141

あとかき

黄砂

バージンロード

街角

東北大震災

桜貝めく爪

ラストミュージック

言葉の森

上昇気流

山女のごんぎり
やまめ

鄙さかる
ひな

銀のブローチ

211 205 201 198 193 188 185 181 177 175 173 171

169 166 164 161 158 156 153 151 148

明日香風

つらつら椿

栲あふちの花

栲ひひらぎの樹下に啄じようびたきむ尉じようびたき鵒じようびたきオレンジ色の腹はらふるはせて

いにしへの襲かさねの色目思はせてくれなるに咲くわが家の蘇芳

末摘花すゑつむはなの屋敷もかくや八重むぐら蓬腰よもぎまで生ふるわが庭

ほしいまま草茂るわが屋敷内見知らぬ人がつつきりて行く

栲の花散る夜の道に「憶良の歌」誦ずしゐて得たり新しき友

水仙の咲けば思ほゆ敗戦後米と替へたる晴着の模様

秋は淋しと言ひて紅葉の柄の帯厭ひし母をふと思ひ出づ

約 束

生れ育ちし博多の海に還らむと願ひし夫との約束果す

博多湾の波間にしばしたゆたひて夫の骨片沈みてゆきぬ

能古島とドームの見ゆる博多湾を自在に泳ぐ夫のまぼろし

夫^{をっ}との約束果して志賀島の北端に子らとグラスを合はす

出張の子を見送りてその踵^{きびす}返して映画「シカゴ」観にゆく

不良老女になれる心地す「めぐり逢ひ」「シカゴ」と映画の梯子^{はしご}してゐて

蘇州の空

煉瓦塀に囲まれし胡同^{フートン}の中庭に練炭あまた積みあげてあり

外つ国に侵されつづけし上海^{シヤンハイ}の林立のビルを江^{かう}は映せり

消さねばならぬ煩惱あはくなりし身に鐘をつきたり寒山寺にて

子と孫の次つぎと撞く寒山寺の鐘の音^ね蘇州の空にひろがる

上海のビルの林立 蘇州の川に住む人らとの落差思へり

かつてわれのせしごと蘇州の軀たち練炭の火をかがみて煽^{あふ}ぐ

運河に降^{くだ}る石段に寄せてくる水の面^{おもて}に低き家並ゆらく

春一番

しめやかに地面を濡らす音のする春一番の荒^{すさ}びしあとに

文明の一つを育みしチグリス川愚かなる戦^{いくさ}の血にて汚すな

映画のシーンのごとく頭に手を当てて降伏してくるイラクの兵士

「自衛隊派遣衆議院通過す」と朝刊の見出し大きくあらず

かつて歩みし道と思ひぬイラクへと軍靴^{ぐんくわ}ひびかせ征く自衛隊

志賀島

波荒き玄界灘と博多湾を分けて伸びる海の中道

志賀の神祀る宮居のたぶの葉をふるはせ小綬鶏啼きわたりゆく

一号碑

「志賀の山いたくな伐りそ」の白水郎の碑を椎の葉覆ふみどりも深く

二号碑

漁り火のごとくほのかに妹を見たしと刻める歌碑は読み人知らず

三号碑

疎林ぬけて来し玄海の見ゆる丘黒御影の歌碑陽を照り反す

四号碑

山人参白じろと咲く坂登り遣新羅使の碑尋ねあてたり

四号碑

遭難せし荒雄に潜きて逢ひたしと切なき妻の歌に膝つく

五号碑

朱の船の遣新羅使は波鎮めを祈りしならむこの沖つ宮

襞多き秋月石に「藻塩焼く煙たなびく」の歌刻みあり

六号碑

束の間の潮引く浜に打ち出でて天草、若布きそひて拾ふ

玄海より吹く風にたつ波の上田鶴なきわたりし万葉の代は

七号碑

夜を通し魚釣る舟に待つ妻を思ふ碑 花咲く樗あふちの下に

八号碑

也良やらの崎見ゆる磯辺の歌碑仰ぐ海人あま漕ろぐ櫓の音聞えはせぬか

九号碑

藻塩焼くために黒髪ととのふる暇いとまなしとぞ志賀の海女あまたち

十号碑

みちのくの宿

濃く淡く若葉萌えたつみちのくの青葉城址はみどりの錦

白樺に鳥の巣箱のかけてあるペンションに決むこよひの宿り

明け早きみちのくの宿に幾すぢも光射し込む微塵浮かせて

子のいびき軒と嫁の寢息を聞きてゐつ岩手山麓のペンションの朝

天霧らふ景にうべなふえぞ蝦夷びとの神宿る湖うみと言ひし田沢湖

太平洋の架け橋にならむと少年より志しゐし新渡戸にと稲造

みちのくの未だ芽吹かぬあけぼの杉の輪舞に出逢ふ列車の窓ゆ

名も知らぬ裸木林の低山にえぞ蝦夷山ざくら白々と咲く

宮沢賢治が年に幾たびも挑みたる岩手山聳ゆ雪を被^{かつ}きて

碓氷峠^{うすひ}

尖る峰重なり合へる妙義山この山見つつ父育ちしや

亡き父の好みし椽^{とち}の焼餅が名物となりて峠に売らる

縁人絶えたる父のふるさとを過ぎて碓氷の峠越えゆく^{えにしびと}

防人は幾日^ひをかけて越えしならむ碓氷峠の九十九折りの道^{さきもり}

軽井沢過ぎてアルプスの槍ヶ岳雲にかくれて鉾先見せず

風鈴

子のもとへ行かむかこの家死守せむか貝殻細工の風鈴が鳴る

終の自転車^{つひ}購^{あがな}ひたるは十年前生きのびてまた買ひ替へむとす

ひとときのまどろみ深く目覚めたり現^{うつ}はたそがれ はたかはたれか

震度3強ほどならむ電灯の傘をゆすりて暁^{あけ}の地震^{なみ}過ぐ

肖像画

稲熟るる田圃に幾体並ぶ中ヨンさまらしき案山子のありぬ

映画館にて割引切符渡されぬシニアの証明さし出さずとも

眉と眼の間^{あひ}広くして生前よりやさしく仕上がる夫の肖像画

住みなれし「上宮永字倉屋敷」の由来聞かざるままに夫逝く

硝子戸をノックすること羽撃ちてとんぼは夏の訪れ知らず

槇^{まさき}の枝^えにひよどり蚯蚓^{みみず}をくはへきて飲みこみにけり首を伸ばして

もうひとつ釘うつ思ひに書き溜めし『私の伊勢物語』纏めむとする

紙と鉛筆あらばと短歌に誘^{いざな}ひし古田さん故郷の熊本へ去る

水晶体

残る世のいつまであらむ水晶体替へて未来の景色みつめむ

パンドラの箱のごときが黒々と居坐りてゐぬ手術^{オペ}中の眼に

手鏡にて眉描くとき人工の水晶体がきらりと光る

読み疲れ目薬させば人工の水晶体が乱反射する

水晶体替へてもさやかに見透せず文目あやめもわかぬ未来の景色

子のすすめに各窓々の防セキユリテイ護つけて眠りの深くなりたり

独り住まひの安心を購ふ世となりぬ向う三軒空家となりて

午前四時セコムを解きて新聞を取りに出づれば残月かかる

岡城址

竹の杖突きて子の手にすがりつつ石段いしきだのぼる岡城さして

岡城のきざはし登りて振り返る目に万葉の名欲山なほりやま見ゆ

名欲山越えて又来むと遊行うかれめ婦女に誓ひし万葉の官人つかさびと思ふ

岡城の盛衰知りぬむ稲葉川、白滝川のたぎつ瀬の音

岡城の本丸址の社やしろの鈴鳴らせば木々の春鳥こたふ

吾^{われ}亦^も紅^{かう}採^{さい}りに持ちゆきし花^{はな}鋏^{さばり}十^{じゅう}文^{ぶん}字^じ原^{げん}に埋^{うづ}もれてゐむ

棄^すせて記憶^{きこく}のもどるところまでさかのぼり読む『海^{かい}辺^{へん}のカ^カフ^カ』

さいはての三^{さん}井^い楽^{らく}

亡^なき人^{ひと}に逢^あへるといふ西^{せい}の果^は三^{さん}井^い楽^{らく}の崎^{さき}に佇^{たたず}ちつくしゐつ

千^{せん}匹^{びつ}の白^{はく}犬^{いぬ}が走^{はし}るごとく見^みゆさいはて三^{さん}井^い楽^{らく}の荒^あれ狂^{くる}ふ海^{かい}

遣唐使の最後に寄りしぎやうがさき漁津崎風吹く方向かたへ荒磯松這ふ

キリシタンの密ひそかに住みゐし姫島を眺めぬ波のしぶき浴びつつ

さいはての地は外つ国の玄関と三井楽の人らいきほ勢ひてゐつ

黒潮にのりて対馬に米運ぶ荒雄の船漕ぐ姿た顕ちくる

ロボット

銅板の太き巻物銀色に輝きてあり工場こうばの入口

大きな音たてて鋼板プレスされ車の屋根のかたち生れぬ

青空を誰がのぞくや窓のある側面瞬にプレスされたり

ロボットがひとくねりして溶接を繰り返りかへしゐつ火花散らして

整然と片づきてゐる場内を部品を積める台車を通る

異なる車体にはむる部品のたぐひ違はずにするは若き工員

融通のきかざるロボットをフォローして人がはめ込む車の座席

イエローに輝き生れし新車体エンジンふかして走り出したり

手を振りて

手を振りて子は空港に迎へ来ぬ贈りしチェックのマフラーをして

海底のトンネル抜けて手をかざす今し落日の輝きに逢ひ

丹沢の嶺の稜線残照に染まりて上弦の月淡く浮く

韓国ドラマ「冬のソナタ」にはまりゐる嫁と語りぬ鍋かこみつつ

スペイン語の電子辞書を携へて出張する子を嫁と見送る

明日香風

はたちになるわが乙女子の振袖にそのみ古代の明日香風吹く

いろは楓の赤き花芽か竹とんぼのごとく飛びたつ空に向ひて

鳥籠より逃げたりといふ鶯がわが庭にきてパーフェクトに鳴く

モーツアルトのアダージョ大きく流しても囀りやまず木々の小鳥は

萌え出づる銀杏に向きててふてふが舞ひ上がりゆくいや高々と

いぶかしむ

如何なる未来がふりかかるらむこの曾孫花の唇しつかり閉ぢて

黒目がちの瞳^{ひとみ}みひらきいぶかしむ初めて逢ひたる曾祖母われを

伊豆の海にかかるむら雲^{こがね}黄金色に染めあげて昇る朝の日輪

浄蓮の滝まで行けず踊り子の歩みし峡をたをたをと行く

つらつら椿

視覚障害の人らに請はれ万葉の「あかねさす」の歌節かしつけて読む

藪椿やぶつばきを手にまさぐりて見えぬ眼をまたたかせ聞く「つらつら椿」

分間わくまの浦に流れつきたる使人らの歌に目を閉ぢ耳をそばだつ

アンコールにつらつら椿の歌うたふやがて和しくるる数人かずがあり

消えゆく霧

台風の去りたる後に思ひ出すごとく棕櫚しゅろの葉さわがして風

山あひに湧きて消えゆく霧のごとき交はりなりしか友は去りたり

友の心の解くるを待たむ黄金色に透くる榎くわりん酒しゅ見みつめつつるて

スーパーが倒れてしばらく後に来しコンビニもたたむこの街の角

有野正博先生

みづうみの畔^{ほとり}に蠟の灯を点し歌の心を導きくれき

原稿を届けに師の家訪ねし日熟れし烏帽子^{えぼし}柿挽ぎてくれたり

「万葉集の庶民に焦点あてて書け」といふ師にひたすら励みきわれは

反発すれば手を震はせて怒りたる有野先生若かりしかな

「久恒さあん」用ある時の師の電話もう決してかかりては来ず

ことさらに近寄らざりしを過去形に詫びて白百合師の胸に置く

歌の宴 師は浄土にて開くらしポーチュラカの花湧くごとく咲く

ごんぎりに舌つづみ打ちき求^く菩提^{ぼて}嶺^ねに健やかなりし恩師と共に

宴^{うたげ}のあとの盃のごと散りてゐつ夾竹桃の白き花がら

雲の帽子

由布院の視察に来たる子のもとへ各駅停車を乗りつぎてゆく

車窓にせまる 崖^{きりぎし} おほふ蔦の葉よりしづく垂れきぬ雨霽^はれて来つ

「未通^{をとめ}女らが放^{はな}りの髪」と詠まれたる由布岳聳ゆ雲なびかせて

由布岳は雲の帽子を脱ぎくれぬ久びさ逢へる子らと仰げば

由布院の社^{やしろ}の神を守ると聞き尋ね来たりぬかつての歌友

二十年前と変らずと言はれたり君は神主清しく瘦せて

ミステリーめく

紅葉尋^とめトンネル抜けて又入る行く先決めねばミステリーめく

台風の木々倒されて現はるる七福神の巖そそりたつ

紅葉浮く露天風呂に浸りつつまなかひに聳^たつ由布岳仰ぐ

雉鳩の飛びきて銀杏の葉を散らす首まで浸^つかる露天湯の中

バンザイ崖^{クリフ}

敗戦の日のごとく焼けし浜の砂美智子皇后み手に掬^{すく}へり

追ひつめられて島民果てしバンザイ崖^{クリフ}両陛下佇^{たつ}つみ頭^{かうべ}垂れて

退却を転進といひ、全滅を玉砕、敗戦を終戦と言ひき

兵士らの死体に埋まりしサイパンの浜いくたびも潮洗^{うしほ}へり

神宮外苑雨降る学徒出陣の映像に眼鏡の亡き夫探す

大かたはつひに還らず出陣学徒雨中に栄誉ある演出みせて

戦争の話は退屈といふ児らに如何に知らせむ戦いくさの無惨

霽はれしかと

古きアルバム

若き夫が幼き子らを連れてくる古きアルバム見てゐるわれに

抱きしめてやればよかつた泣かされて帰りし子らを叱りし記憶

初めての子にわれの名の「啓」の字をつけし亡き夫思ひてをりぬ

耳搔きを持ちてわが膝取り合ひし子らよいづこへ行きたるならむ

「お魚のお顔ばつかりなぞ炊くの」幼は犬の餌を煮るわれに

五月待ち薫風となりて亡き夫は旅をしてゐむ雛罌粟見むと

指呼しつ

朝食後血圧、薬、新聞と指呼しつ大切な今日が始まる

風の日^{はしこ}に友と映画の梯子する「武士の一分」「硫黄島からの手紙」

めくるめく日射しつづきて熊蟬のあまた落ちゐつ仰向きながら

独り暮しの故にそ知らぬ顔をせり電気の消し忘れ鍋の焦げつき

日の丸の旗かかげあり文化の日水色シーツのホームレスの屋根

齒に衣きぬを着せぬ言葉に歌評せし満州育ちの奥田さん逝く

いつの何処いづこの自分自身に逢ひたきや帰る帰ると繰り返す友

鍵、鍵と常探しゐる友にしてレースを編めば手元見ず編む

長春の風

蛇行せる河凍てつきて長春の名のみの春の光を反す

開拓者、孤児らの血涙染む土に機影おとし降りたたむとす

土色の旧満州の平原はわれらを迎ふ表情もなく

近代史研究をする沈先生 子の講演を通訳するは

中国の知性に逢ひぬ吉林の大学歓迎宴の席に

高粱を精製重ねしスピリット香りも高き白酒かかぐ

日本語にて『日本近代史』を著はしし沈氏われにも一冊賜ふ

此の頃は日本の政治はをかしいと沈氏は言へり遠慮しがちに

日本の少子化対策見守^{まも}らむといふ伊先生は大の酒豪家

日本語にて流暢に語る宿^{しゆく}先生 中世の『方丈記』が専門といふ

ラストエンペラーの数奇の生涯あらためて思ひつつ聴く長春の風

年老いし恋人に逢へる心地しぬ青島^{チンタオ}旧市街の壁の崩れに

かつてわが住みし洋館に招きくる八十歳の元軍人夫妻

帰国後に一人のデモ伝ふ日本歴史の歪曲わいきよくを言ひて

へうへう
飄飄と

わが町をたちまち灰色の雲おほふ横松宗先生逝去と聞きて

地域の文化高めて叙勲を拒みたる無冠の先生尊しと思ふ

同人誌に名もなき「忘れ得ぬ人たち」をあたたかき眼もて書きし先生

良き点を認めて出る釘打たざりし器大いなる先生なりき

鱧^{はも}ちりの湯気をたたせて天下国家論じぬし先生 夫も今亡し

書類鞆^{へうへう}持ちちて飄飄と喫茶店に入りゆくを見つ横松先生

今^{いま}際の夫を見舞ひくれたる最後の人は横松先生なり今に思へば

色に重さが

ケーブルと共に紅葉がゆつくりと鶴見山頂に濃さを増しゆく

鶴見岳の朱の宮居によき歌を賜へと祈る双手合せて

高崎山越ゆれば浮びし棚たななし無小舟別府の海は藍深く風ぐ

萩行きの各駅停車に乗りてゆく半月遅れの彼岸花燃ゆ

くれなゐが下にゆくほど青む蔦 色に重さがあるかのごとく

地に落ちし首すげられて如来像の唇赤し雨ににじみて

はがね
鋼のごとく

鋼のごとく切り立つ蔵王嶺に片寄りて初冠雪は東西分つ

散り残る紅葉に今朝は初雪の花咲かせぬつみちのくに来て

白虎隊の生き残りといふ少年より悲話の伝はる戊辰の役の

砲煙に包まるる城を仰ぎつつ自刃せし白虎隊
飯盛山に

いひもりやま

頬赤き少年白虎隊の自刃せし飯盛山の楓火と燃ゆ

霽^はれしかと

霽れしかと思へば雪の乱れ降る東北道をひた走りゆく

ホテルの窓にひねもす雪の霏々と降る茶臼、那須岳姿を消して

車の屋根にはんぺんのごとき雪を乗せ連なりて来る東北道を

前方の叢雲多しと思ふ間に視界を消して雪吹き荒ぶ

小麦粉を撒きたるごとき雪けむり蔵王風おろしのつる畠に

蔵王嶺ねに雪あまた降らせ乾きたる風吹き荒ぶ仙台の街

華やかに雪をかつける櫟並木くぐりて子らと買物へ行く

決断の素早き嫁と遅きわれ土産の店に品を選びゐる

藍深き勾玉型のラピスラズリーのペンダント買ふ嫁と揃へて

阿武隈川

光太郎の歌ひし「光る阿武隈川」枯葦生ふるあはひを流る

とんからりと布織りにけむ狂ひたる智恵子の部屋の古びし織機

離れ住む子は決断して来よと言ふ庭木ゆるがせ風荒ぶ日に

ギター弾く少年は白き指先の意外に固しとわれに触れさす

由布岳

雪道の熊笹分けて万葉の恋歌^と尋め来由布の麓に

銀杏、紅葉降りしきる下万葉の作者未詳の歌碑の佇ちゐつ

雲の間を通して光が幾すぢも矢のごとく射す官人つかさの歌碑に

樹齡千年の杉をめぐれば畳三枚敷くほどの広き洞をもちゐつ

裏由布の山ひだ険けはしその影が雲の動きにつれて移動す

由布岳のシルエット淡く浮びゐる午後より雨の予報当たりて

雨粒の落ちきて水輪のせめぎあふ金鱗湖の上うぐひ鰾はねゐる

暮れなづむ盆地の底ひ由布岳は大き塊りとなりて迫り来

遠朝廷とほのみかど

大宰府の遠朝廷の碑をかこむ海桐花とべらの垣根うつつに白し

観世音寺の楠の巨木の走り根に苔の花咲く盛りあがりつつ

むらさきの檣あふちの花の雨に濡れ憶良は旅人たびとの嘆きを歌ふ

觴さかづきに梅の花びら浮べつつ飲み乾しにけむ風流士旅人みやびを

坂上郎女さかのうへもぬし宴うたげかな雪の白うばひ咲く梅の下

山羊の乳煮つめて作るチーズめく「蘇^そ」とふ古代食味はひてゐつ

五月雨の上がらむとして大野山の霧たちのぼるいさよふ風に

不揃ひの屋根

東シナ海好みし遠藤周作の記念館はその突端に建つ

キリスト教を究めむとせし遠藤周作 もひとつの顔かぐうたら人生

とびいろ
鳶色の瞳の澄めるシスターのオルガンに合はせ賛美歌うたふ

麻布にさへぎられたる懺悔室の出窓に蠟^{らふるい}涙したたりてゐつ

シーボルトの好みしあぢさゐ「オタクサ」の花玉白く庭に浮きたつ

トンネルを幾つも抜けて海際の隠れ切支丹の不揃ひの屋根

心地よき孤独

水しぶきたてずに泳ぐクロールの五百メートルは私のノルマ

前世は魚かも知れず水中に入りて泳げば無心になれり

三月生れは魚座のゆゑと友に言はる水中にゐるこの開放感

朝日の斑映れる水にもぐりつつ泳ぐしばらくは心地よき孤独

重力のある世は辛し水中の浮力たよりて大股に歩く

五百メートル泳ぎて帰る道すがら濡れたる髪が魚の匂ひす

空気中より水中が好きあの世にもクロールきつて泳ぎゆきたし

オリブの実

玄海の飛魚あごのごとくに飛び出でてボールを掴つかむゴールキーパー

しろたへの胡蝶蘭の終つひの花開きて初はつの花びら散りぬ

いつか見し君の家なるミモザの花風吹き荒るるこよひ揺れるむ

過去の憂すぎゆきひを梳かき風吹きぬミモザの花を尋ねかゆかむ

イタリーの長靴の先が蹴らむとするシチリア島へ友は行くとふ

オリブの黒き実食めば亡き夫と行きしラ・マンチャ目交まなかひにあり

十日月

大根を齧りて哭きしスカーレット・オハラ戦後のわれは馬齒莧すべりひゆ食みき

陽気メリーウイドウな未亡人同士に仰ぐ十日月蛋白質をおぎなひしあと

抵抗をしてゐし友がシルバーカーを「つ」の字に腰を曲げて押しゆく

銀杏、楓、南京はぜの散り敷けるだんだら模様の歩道を歩む

夜をこめて吹きし野分に早春の庭いろどりし楓の倒る

お裾分けと友の持ちくる通ひ路を野分に倒れし楓がふさぐ

雨のカレル橋

リボン放てるごとく光るはシベリアのアムール河か白夜に映えて

高度一万、マイナス四十度の過酷なる空を飛びゆくこの飛行機は

夫の介護に曲がりし指を娘は撫でつつ座席に隣る飛行機の中

気圧の変化か上下左右に揺れはじめウラル山脈越えて行くらし

六年住みしフランクフルトに降りたてる娘夫婦の眼輝く

バイエルン地方の樹々に啼く鳥もドイツ語ならむ耳馴れぬこゑ

大木の並木はマロニエ青き実を結びて夏の光をはじく

ドイツ人と共に棲むとふ日本女性ユーロ高託つスーパーにゐて

戦^{いくさ}に焼けし石と新しき石組めるフラウエン教会のモザイク模様

傘さして渡りゆく雨のカレル橋チエコの苦難^もの歴史思ひつつ

キリスト教の改革叫びしヤン・フスの処刑の広場夏なほ寒し

「プラハの春」を思ひ出だしぬソ連に抗し焼身自殺を遂げし学生

共産政権崩壊せむと無血^{ピロート}革命やりとげしチエコの人ら^{たくま}遅し

カレル橋の雑踏の中スメタナの「わが祖国」歌ふチエコの人びと

身捨つるほどの祖国を歌ふチエコの人羨しと思ふ苦難を思ふ

まひまひつぶり
舞舞螺

「醜^{しこ}の御盾」と万葉歌抽^ぬきて一億^{いっおく}が戦^{いくさ}になだれし記憶忘れず

「海ゆかば」を歌ひて戦に荷担しき聴くたび心の傷あと疼く

敗戦ののちの貧乏物語競ひて話す楽しむごとく

宗教戦争、民族紛争のなき日本それ故^{こんにち}今日の平安がある

明滅する星かとまがふ機影見ゆ音もたてずに何処へゆくや

魁皇に辛勝したる白鵬の肌くれなるに花道を退く

優勝の琴欧州は唇をかすかに動かし君が代歌ふ

病む夫の看とり解かれて六年余耳鳴りいつしか消えてゐたりき

豌豆ごはんふつくらと炊く東京より腰病むわれを見舞ひ来し娘は

業平が好きになりぬと便り来ぬ『私の伊勢物語』読みくれし男^{ひと}

魚^{うを}売^うる人とわれの育てし玉葱を物々交換せし日のありき

あぢさゐの葉に止まりゐる舞舞^{まひまひ}螺銀のあと引き何処へゆくや

広き葉の重なりの中抽んで擬宝珠の花はかなげに咲く

デニムの帽子

半世紀沈みしままの戦艦^{ながと}長門 火砲^{はつ}は魚の住処となれり

麦畑にて機銃掃射を受けしこと蘇りきぬMRIに

アフリカの骨あらはなる子ら思ふ大喰ひ競ふ若きらのゐて

右に寄れば右　左に寄れば左へと遺影の夫の目われを放さず

梅雨明けの一陣の風に飛ばされて川流れゆくデニムの帽子

出張の子と落合ひて三隈川みくまの鵜飼を見つつ枕並べぬ

「ぢや又ね」子は駅の階登りゆく曲がり角にてまた手を振りぬ

呆くるのが恐いと言ひて長病む友『徒然草』を書き写しきぬ

姑、母、夫逝きて子らも去りゆけり二十四時間がわがものとなる
しょうとめ

てにをはと文法整へ読み下す歌は前より趣に欠く

カタルパの花

徳富蘇峰の歴史書百卷並びつ作家競ひて用ゐしといふ

新島襄にひしまじやうが蘇峰に贈りしカタルパの花咲かさむと樹肌つやめく

純白にむらさき斑入りのカタルパの花想ひつつ 裸木^{はだかぎ}仰ぐ

雪の日に映画の梯子せし切符二枚がズボンのポケットにあり

手を振りてひらりと背を向けお先にと君は逝きたり桜を待たず

多摩川

人ごみの中に娘^{むすめ}を待つわれは新宿駅にて迷^{ストレイシープ}へる羊

多摩川に架かる鉄橋上り下りの電車が瞬にすれ違ひたり

百ミリの雨降りしあとの多摩川は河川敷おほひ濁流はやし

濁流の引きて橋下のホームレス葦の葉かげに体拭きゐる

多摩川に素足^{すあし}浸して布晒す娘^{をとめ}子の万葉歌碑に出合ひぬ

多摩川に沿ひて走る子自転車にて伴走するは嫁の恭子さん

防人の別れ惜しみし峠道開発されて子らの住みゐる

防人も新撰組も往き来せし多摩の横山は子の通勤路

多摩川のほとりに住まうと子は招く庭の棕櫚竹又もゆれ出す

不等辺三角形

荒川にさしかかる時此処はいつも電車が揺れぬ娘の家近し

拓かれし丘は名残りの葛の蔓伸ばして笹百合の花をかかげぬ

未だ鱗になりきれぬ雲ただよひて東京タワーをゆらめかせゐる

飛び来るはひよどりのみと嘆きつつ一眼レフ持ちメジロ待つ人

子の妻を家庭^{いへ}のジェネラルマネージャーと言ひつつ過す数日間を

公務員試験勉強の子が点す離れの明かり臥床に届く

八王子、横浜、市川と子らの住む街を結べば不等辺三角形

曾孫とオセロゲームを競ひゐて同人誌の校正追ひかけて来ぬ

白き蝶

意識なき妹の耳に口寄せて「ミチコさあん」とその夫叫ぶ

睫毛長き妹をかつて羨しみき二重まぶたの眼ひらかず

妹の外反母趾の尖りきぬ意識なきまま臥して二ヶ月

母父おもちちが迎へに來たるや妹は手をさし伸ぶる形に動く

この橋を渡らば健やかな妹に逢へる氣がする日射しを歩む

別れを告げに來し妹か 柊ひいらぎの葉むらにしまし白き蝶舞ふ

石路つはの花声なく咲けり妹の今際いまは、夜伽よとぎと眠らざる朝

妹の看とりに過ぐせし四ヶ月のカレンダー剥ぐひと息に剥ぐ

兄弟姉妹それぞれの挽歌うたひあげ枯草原に佇ちつくしゐつ

着ぶくれて

相克のはてか椿のはたと散り傍らの蕾ほかりとひらく

かの人の抱へし闇を思ひゐつわれに投げかくる冷たきことば

人を信ずる心の失せて風の日を着ぶくれて籠る数日間を

青空を真二つに裂く飛行機雲無援の思ひかみしめて佇つ

わが心責むる思ひにとらはれて月の満ち欠け見ずに過しき

春の望月

葉のすべて落ちしあふち 樗の黄なる実をまるごと飲みこむひよ 鶉集ひきて

冬ざれの中にくれなるの藪椿このあたりかも君住みし家

落のたう、土筆顔出す畑となる野菜つくらずなりて八年

人種の壁破りて黒人オバマ氏が大統領となる空は晴るるや

物質にては心満たされぬ白蓮^{びやくれん}を実感せしのみ伝右衛門邸に

消滅の言語があればアラフォーやアラカンといふ新語の生まる

アラ還の同窓会をすと言ふ戦争を知らぬわが男の子

心地よきたかぶりもちて短歌^{うた}の会辞する夕べに春の望月

立待月は雲の切れ間を移りゆき門掛松を時をり照らす

西空の有明月を見よと電話眠りむさぼるわれの起こさる

後朝きぬぎぬの文をもらひしときめきをもちて見上ぐる有明の月

この冬が勝負と言はれし病む友とうす紙のごとき残月仰ぐ

海峡

懐かしさも悲しみもすべてうち捨てて波静かなる海峡わたる

海に向く街に野ざらしの機械並み午前のひかりに輝きてゐつ

上り下りの新幹線がすれ違ふ横揺れに揺る地震なみのごとくに

家並低き岡山を過ぎ瀬戸海をへだてて四国の山なみの見ゆ

葦生ふる木曾川、蛇行する長良川つぎつぎと海へ流れてゆけり

くれなるの陽光ざくら盛りといふ子の住む東京へ近づきて来ぬ

三月尽八王子に住む子の家に桜前線待ちかねてゐつ

次男は五年長男は十年を取れといふ八十歳のわがパスポート

関東の絹の道なるやりみづ鑑水峠の万葉歌碑探す冥き林に

足柄山に夫の帰りを待つ妻の万葉歌碑訪ふ子に手を取られ

旋律暗き

世界一の決まれるフィギュアスケーターに旋律暗き「君が代」流る

戦争の終結疾くと願ひたる昭和天皇の多摩御陵訪ふ

さつきまで清張が坐りゐしごとく机に煙草の焦げあとのあり

天の怒りと恐れしならむ日輪の欠けゆくさまを古代の人は

言葉の森

風の幅ほど

深川つつじに這ひのぼりゆく蔦かづらうつつは白き花を咲かせて

白じろと茅花の穂波はたてがみのごとく靡けり風の幅ほど

風に揺るる折鶴蘭のはな先に塩辛トنبオの長く止れり

目瞑ればわれのめぐりにあるごとしリラ咲き匂ふ仙台の街

婚活を始めましたと女孫より手紙届きぬ写真を添へて

所在なくゐる昼下がり満月ほどの新高梨を友の持ち来ぬ

夏逝きて暦めくればカレル橋セブテンバーソング九月の歌高らかに謳ふ

次の世が向うより近づき来ることし曼珠沙華咲く蕎麦を囲みて

七曲り道

革細工のごとき枇杷の花の下を過ぎ行く宮永七曲り道

夕餉の菜持ちて川沿ひの友の家へ歩いてゆかむ日の暮れぬうち

少女期を共に過しし友どちの終焉ききぬ石路つはの花咲く

いつ如何なる終焉くるやと言ひつつも歌会に集ひ来明るき顔に

眠りしまま逝くかも知れず口紅を引きつつニツと笑みて寝につく

『伊勢物語』のお札と言ひて杜若かきつばたの藍ふかき絵えがを描きてくれぬ

読みさしの本

読みさしの『蜻蛉日記』とり落し眠りしならむ灯をつけしまま

ひと眠りして目覚めしが未だ真夜読みさしの本また手に取りぬ

朝刊を読み終へ二度寝の浅き夢野山からやかに走りてをりぬ

かつて尾瀬の長蔵小屋の傾きを歌ひし友の施設を問はむ

「もう逢ひに行かぬ」と言へり母親が自分を認識せぬゆゑといふ

一人暮しをあぶなげなしと思ふらし子は共住みを言はずなりたり

自民を見捨て民主に失望したる票数千万票いづくへゆくらむ